

割礼考

— 性器への儀礼的暴力 —

一 大人になる儀礼

多くの伝統的社会では、性のアイデンティティを確立して初めて社会の一員として認められる準備が整う。もちろん、性のアイデンティティの確立方法は民族によって異なる。典型的なものは各地に残る成人式のような儀式である。人生のどの段階で儀式が行われるかによって、それがもたらす心理的效果はおおいに異なろう。しかし、ここではそうした効果よりも儀式の意図に着目することにした。儀式が性的に成熟する年齢とずれている場合でも、そ

田中雅一

こに性のアイデンティティの確立が認められれば、それは広い意味での成人式とみなすことが可能だ。このような視点から見ると、青年期に行われる儀式にのみ成人式という用語を使用する必然性はないのである。

それではどのようにして成人式は性のアイデンティティを確立させるのだろうか。それは文化がいかなる形で性を構成しているかによる。子どもを無性の存在としてみるならば、男性あるいは女性の本質が付加されなければならぬ。反対に子どもが両性具有的な存在であるとすれば、同性的なものを増強し異性的なものを排除しなければならぬ。

い。あるいは子どもの男性性または女性性は不完全だから完全にならなければならないかもしれない。これらの觀念が混じり合っている場合もあろう。ただここで確認しておきたいのは、どの場合でも性的主体の確立にはなんらかの暴力が認められるということである。

本稿では、成人式の典型と考えられる割礼を取り上げて、そこに認められる暴力の性格について考えてみたい。しかし、その前により一般的な視点から、暴力と主体形成の関係を位置づける必要がある。

二 暴力理解への視点

すでに別のところで示唆したように、⁽¹⁾暴力は原則として自己否定の暴力と他者否定の暴力の二つに分けられる。さらにこの二つは象徴的なものと実際に痛みが伴う実体的なものとの二つに分けることができる。

象徴的な自己否定の暴力とはいかなるものか。それは自己の身代わりを使用することで行使される暴力である。その典型は供犠と考えることができる。供犠は身代わりを殺したり傷つけることで、主体の再生を可能とする儀礼的な仕掛である。身代わりに行使される暴力は、主体そのもの

を傷つけるわけではないから、たとえ身代わりが殺害されるということが生じても象徴的な領域にとどまるといえよう。そしてその目的はなによりも主体の再生、いまここにあるよりも高い地位（宗教的な救済、あるいは社会的な地位）を獲得するところにある。主体は象徴的に死ぬことで「聖化」されるのである。

これにたいし、身代わりを使うことなく「聖化」を目指す場合がある。成人儀礼におけるさまざまな残酷行為や試練、あるいは火渡りなどの宗教的な苦行は目的は同じであるが、苦痛を伴うという点で実体的な暴力行為とみなすことができる。

概して自己に向けられた正当な暴力には積極的な、そして宗教的な意味づけがなされていることが多い。この場合、暴力は他の手段では不可能な越境——日常世界から聖なる世界への、この世からあの世への、世俗的な世界から超越的な世界への越境を可能とする唯一の手段として受け入れられていることになる。越境という形で表象されている主体の変貌は暴力によってのみ可能なのである。

象徴的であれ、実体的であれ、聖化を目的とする暴力にたいし、自己否定の契機が欠如し、たんに他者の暴力的な

排除を目的とする暴力が存在する。この場合も象徴的な場合と実体的な場合との二つに分けることができる。

象徴的な場合、暴力の対象はやはり代替物に向けられるが、それは他者の身代わりである。その例として傷つけた人物の身代わりとしての人形に針を刺すなどの邪術行為をあげることができる。

実体的な暴力は他者の半永久的な破壊を目指すもので、いじめから、暴動や戦争まで、われわれが暴力という言葉で一般的に思い浮かべる種類の行為——狭義の暴力——である。

以上暴力を大きく四種類に分類したわけだが、この分類は固定した静的なものではない。むしろよりダイナミックな暴力の流れを概念化するために生み出されたものである。四種類の暴力は相互に独立しているのではなく、ある暴力的な現象の四つの局面とみなすことが可能だからである。

たとえば、自己への暴力について述べると、そこで行使される暴力が自己に向けられ、自己の聖化が目指されているにせよ、排除されるのは自己の中に混ざり合っている他者なるもの、あるいは異質なるものであるということがし

ばしば認められる。その意味で自己への暴力は他者（自己の中の他者）への暴力でもある。その際、悪霊に憑かれた病人にたいする祓除儀礼のように、自己の身体から異質なものを排除する点のみが強調され、再生の観念が弱い、自己否定の暴力のヴァリエーションも認められよう。

さらに自己否定の暴力によって聖化された主体は、これを契機として他者に危害を加えることのできる存在、「戦士」の資格を得る場合がある。己を克服したもののみが他者をも克服できるというわけだ。この場合、自己への暴力は他者への暴力を引き起こす条件となっていて、単純に自己への暴力と他者への暴力とを分離するわけにはいかないのである。

三 男性の割礼——包皮の削除

割礼は一般に性器への身体加工を意味する。男性の場合、もつとも典型的なものは包皮の一部削除である。

宗教上ユダヤ教徒やイスラーム教徒が割礼を行なうこともあって、世界中に分布が広まっている。他にも、ポリネシアやメラネシア、アフリカ各地の民族、アメリカ・インディアン、オーストラリア・アボリジニなどにも認められ

る。

包皮を削除する割礼には、神との契約の印を意味するユダヤ教の場合のように宗教的な性格の強い説明がなされることもあるが、一般には清潔さを保つことや過渡の自慰の禁止などが合理的な説明として挙げられている。本稿で注目したいのは、しばしば包皮が男性の女性的な部分とみなされていることである。⁽²⁾ここから、割礼は身体から女性的なものを排除して男性としてのアイデンティティを確立するための儀礼とみなすことができる。女性的なものを排除するために暴力が行使されるのである。これを母と息子との象徴的な分離の儀礼とみなすことも不可能ではない。というのも、ここで排除される女性の原型とはいままで育ててくれた母であるからだ。

割礼という自己への実体的な暴力によって、少年は母との結びつきを象徴的に切断して真の成人となる。多くの伝統社会では割礼後性的な交渉や結婚が許される。その理由は、母との切断によって、少年は性的主体として自立し他の女性との性交渉が許されるからだ。母との関係の切断が性的主体としての男性を確立し、女性の「征服」を可能とするといってもよからう。

これに関連して、東アフリカのグシイ人の少年の感想を紹介しておく。

「割礼の後ベニス⁽¹⁾は鋭くなり、魅力的になります。だからヴァギナに入れるときにも手間がかかりません。性交しているとき、頭の中が気持ちよくなるのです。……割礼がすむと、とても性交がしやすくなります。⁽³⁾」

四 女性の割礼——クリトリス削除と陰部封鎖

女性の割礼はアフリカ各地、オーストラリア、南アメリカに認められる。

女性の割礼はクリトリスの皮の一部削除、クリトリスの削除、陰部の縫合などいくつかに分かれる(図1参照)。

女性の割礼については、清潔さを保つため、美的観点から、健康のため、受胎能力を高めるため、性的な放埒を防ぐため、結婚まで処女性を保つため、男性の性的快楽を高めるため、といった説明がなされてきた。⁽⁴⁾本稿でとくに注目したいのは、女性のアイデンティティの確立と、セクシユアリティの統御についてである。

まずクリトリス(あるいはその一部)の削除について考えてみよう。包皮が女性的であるとみなされていたのと同

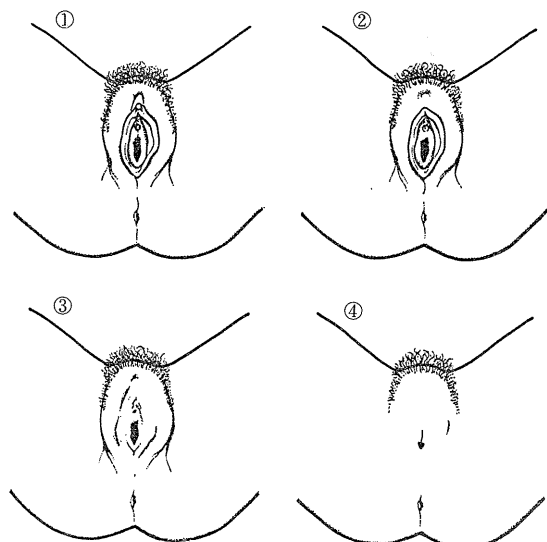


図1 女性の割礼のタイプ (文献(4)より一部修正)

- ① 女性の性器 ② クリトリス削除 ③ クリトリスと小陰唇削除 ④ 陰部封鎖

じように、クリトリスは男性的なものであるとみなされている⁽⁵⁾。したがってこれを削除するような割礼は男性的なもの否定である。クリトリスのある女性は真の女性とはみなされない。そして割礼をして初めて結婚も可能となる。

男性と同じく女性も割礼によってアイデンティティを確立する。

しかし、割礼後の性的な行動は男性と女性とはおおいに異なる。というのも、男性の場合はすでにみたように、包皮の削除は性的快楽の増加を伴うが、女性の場合むしろ割礼の効果は快楽を減退させるからだ。すなわち、クリトリスが女性の性的快楽の主たる器官であるということを考慮するならば、クリトリス削除は性的存在としての女性——性的快楽の享受者としての女性——を否定する身体加工である。割礼はたんに女性を女性たらしめるのではなく、結婚まで処女を守る、より貞淑なる女性をつくりあげるのである。反対に割礼を受けていない女性は売春婦とみなされることもある。

こうした態度の背後には女性のセクシュアリティは本来危険であるという観念が潜んでいる。女性が自身のセクシュアリティを統御するのを助け、男性から守るために割礼が必要だというのである。

また出産の際に乳児の頭がクリトリスに触れると死ぬから、これを削除すると理由づけている場合もあるが、この場合、性的な快楽と生殖とは相対立するものとしてとらえ

られていることが分かる。

割礼が女性のセクシュアリティの抑圧に貢献していることをもつともよく物語っているのは、クリトリス、大陰唇と小陰唇などの外陰部を削除してから、尿と経血の出る直径数ミリの穴を残して陰部を縫合する割礼である。

この種の割礼は陰部封鎖と呼ばれ、とくにエジプト、スーダン、ソマリアなどのアフリカ東北部で広くみられる。これは残酷であるとして国際的な非難の対象になっている。

たとえばスーダンでは七歳にもなると少女はこの種の割礼を受ける。⁽⁶⁾後ろから女性を羽交締めにし、陰部を酒に浸した綿布できれいにする。そして大陰唇に麻酔の注射をして、クリトリスを削除する。それから小陰唇すべてと大陰唇の一部を切りとる。最後に陰部を前から後ろへと縫合する。二日後にこの糸を抜き取る。

結婚では縫合された陰部を花婿が開いて、処女である証拠（出血）を公表する。初夜は花婿にとつても厳しい試練となる。このため割礼の手術を行なった女性の割礼師を密かに初夜の場面に呼んで膣口を開けてもらう花婿もいる。また女性の割礼師が破瓜を行うところもある。さらに出産

のときには、会陰切開やその他の部分をさらに切り開く必要が出てくる。そして出産後また膣を狭くする。

以上を簡単にまとめておこう。男性と女性の割礼の対比を先の暴力の分類を念頭に考えるとどんなことが言えるだろうか。まず、どちらも実体的な暴力、身体加工を伴う。そしてどちらも主体の変貌が期待されている。変貌はどちらも自己への実体的な、しかしきわめて文化的な価値をもつ暴力によってなされている。

女性の割礼、とくに陰部封鎖は、女性を性的に解放して、暴力の主体に変えることではなく、反対に男性に従属させるための身体加工である。この意味で陰部封鎖を受ける少女はまさに社会の異質な存在、他者性を刻印されるという解釈もできる。女性の割礼は男性中心の社会からの排除そのものを意味しているのである。欧米のフェミニストたちは割礼の廃絶を主張してきたが、その理由はたんにそれが女性の身体に多大な弊害を及ぼすというだけではなく、それが女性そのものの存在の否定であり、そこに家長的イデオロギーの作用を認めたからに他ならない。

このように考えると、割礼は男女の性器にたいするなん

らかの実体的暴力であるが、そこに認められる意味は正反對となる。すなわち女性的なもの（異質性、他者性）としての包皮を削除することで社会の眞の構成員たる存在へと、眞の「人間」へと変貌する契機となるのが男性の割礼であるとする、女性の割礼の場合には、男性的なものとの排除という側面はあるにしても、その本質は社会における他者的存在としての刻印であり、女として持続的に被ることになる社会的（家父長的）暴力を象徴する最初の一撃なのである。

しかし、このような割礼の解釈からはなぜ女性が積極的かつ主体的に参加するのかという問いについて十分に答えることはできない。女性の割礼に積極的な意味を持たせている社会は本当にないのだろうか。以下に述べるのはこうした問題意識にたった新たな解釈である。

五 陰部封鎖——もう一つの解釈

ジャニス・ポッディはスーダン北部の調査から従来の女性割礼観とはまったく異なる結論に達した。⁽⁷⁾⁽⁸⁾ 女性の割礼にも積極的な意味が認められるというのである。

ポッディのインフォーマントによると、女性の割礼は若

い女性たちを清め、浄化し、なめらかにするためになされる。清められていない女性は結婚できず、子どもを生む力もない。

ここで問題となっているのは、すくなくとも女性にとつてはセクシュアリティのコントロールではなく、むしろ豊饒力を高めることである。豊饒力を高めると信じられている呪物にダチョウの卵や卵型のヒョウタンがある。ダチョウの卵は天井の隅に飾られる前に小さな穴を開けて中身を抜く。それは小穴を残してなめらかになった女性の陰部——子宮の表面——のようだ。そこに共通するのは、相対的に閉じられた世界こそ清らかで豊饒力が宿っているという観念である。同じ観念は女性の体全体にも拡張される。というのも結婚に際して強調されるのは肌の白さ、なめらかさ、しっとりした感じだからだ。

閉じられている空間にこそ豊饒力が宿するという観念は陰部封鎖をされた女性の身体だけでなく、女性の主要な空間である四方が壁に囲まれた中庭にも及んでいる。たとえば流産した胎児は中庭に埋められるが、死産の子どもは中庭と外界を隔てる壁にくっつけて埋める。しかし少しでも息をした後死んだならこれは外の埋葬地に埋められる。つま

り、流産で死んだ胎児は子宮の内部で死んだために中庭に、外に出てきたが息をしいなかった乳児は境界を象徴する壁に接するようにして埋める。ここから外部にたいして閉じられた安全な空間である中庭は子宮を象徴していることが分かる。反対に外部に開かれた空間は危険な悪霊がさまよう世界である。

ポッディはこのようにして閉じられた空間すなわち陰部封鎖された空間としての子宮に付与されている文化的な意味を明らかにする。陰部封鎖は男性による女性の管理や女性のセクシュアリティの抑圧にほかならないという解釈が一面的なものであることが分かる。結婚前だけでなく出産の度に陰部封鎖を行う理由は、緩くなった膣を締めて性交の快楽、とくに男性側の快楽を高めるためでもなければ、本質的にふしだらな女性の管理を強化するためでもない。それは衰弱した豊饒力を再度高めるための、再生の儀礼なのである。陰部封鎖された子宮こそ人々にとって豊饒力の源泉としてのオアシスなのである。

そしてそのような子宮をつくり保持することこそ、多くの子どもを生むことができ、社会の存続の基礎をつくる。とすれば女性にとって陰部封鎖は呪うべき所作ではなく、

積極的な形で社会に貢献する機会を呈示している身体加工であるということになる。

六 文化人類学と暴力

ポッディの女性割礼をめぐる論考は、言語表現にこだわりの慣習的行為の細部に目を配ることで初めて可能となったものである。それは、一見残酷で非合理的な暴力行為が、当事者、暴力の犠牲者たちにとっていかなる意味をもっているのかを明らかにし、そこに認められる積極的な意味を呈示することに成功している。それが告発しているのは、異文化の慣習的行為を残酷であるという理由から葬ろうとする欧米中心的な言説の「暴力」である。

しかし、象徴人類学的手法に基づいて意味や意図が理解できたからといって暴力の弊害が消滅するわけではない。陰部封鎖による犠牲者の死を正当化するわけにはいかないのである。「社会に貢献する」と書いたが、その社会はあくまで男性中心であり、貢献は男性に都合のよい貢献であることを忘れてはなるまい。異文化理解を目指す人類学は、自民族中心主義に潜む暴力にたいして警告を発しつつ、他方で異文化の暴力を手放しで擁護するという相対主

義からも距離を保つという離れ技を今後も演じ続けなければならぬのである。

〔引用文献〕

- (1) 田中雅一 「儀礼的暴力の変容——供犠からジェノサイドへの道程」 『情況』第四巻第一号 五五—六五ページ、一九九三。
- (2) Kennedy, John G. Circumcision and Excision in Egyptian Nubia. *Man*(N. S.), 5:175—191. 1970.
- (3) 松園万亀雄 「割礼について——グシイ族小学生の作文」 綾部恒雄編 『通過儀礼と世界観』 筑波大学文化人類学教室一九八四。
- (4) Koso-Thomas, Oluyinka. *The Circumcision of Women : A Strategy for Eradication*. London : Zed Press. 1987.
- (5) Assaad, Marie Basil. Female Circumcision in Egypt : Social Implications, Current Research, and Prospects for Change. *Studies in Family Planning*, 11(1):3—16. 1980.
- (6) Cloudsley, Ann. *Women of Ondurman : Life, Love, and the Cult of Virginity*. London : Ethnographica. 1983.
- (7) Boddy, Janice. Womb as Oasis : the Symbolic Context of Pharaonic Circumcision in Rural Northern Sudan. *American Ethnologist*, 9(4):682—698. 1982.

- (8) Boddy, Janice. *Wombs and Alien Spirits : Women, Men, and the Zār Cult in Northern Sudan*. Wisconsin : The University of Wisconsin Press. 1989.

〔参考文献〕

- * Abdalla, Ragiya Haji Dualeh. *Sisters in Affliction : Circumcision and Infibulation of Women in Africa*. London : Zed Press. 1982.
 - * Hayes, Rose Oldfield. Female Genital Mutilation, Fertility Control, Women's Roles, and the Patrilineage in Modern Sudan : a Functional Analysis. *American Ethnologist*, 2(4): 617—633. 1975.
 - * ホスケン、フラン・P 『女子割礼—因襲に呪縛される女性の性と人権』（鳥居千代香訳）明石書店、一九九三。
 - * 松園典子 「女子割礼——グシイ族の事例」 『民族学研究』四七巻三号、一九七—三〇四頁、一九八二。
 - * 吉岡郁夫 『身体の文化人類学——身体変工と食人』 雄山閣、一九八九。
 - * 和田正平 『性と結婚の民族学』 同朋舎、一九八八。
- 〔たなか・まさかず 京都大学人文科学研究所 助教授〕